

サブちゃん真骨頂！この一曲で 「神に選ばれた歌手」となる

「函館の女」ひと

昭和歌謡

誕生物語

第1回目

文・山川智

同じ男性演歌でもかくも違うのか。微みつまみ……そんな情念を、いわば月隠れの中で聴く様が演歌が、……サブちゃんは違った。明るく伸びやかな歌声、演歌独特の節回しはあっても、どこまでも軽やかだった。

時代は高度成長期、暗く悲しい戦後の苦衷は捨てよう。前向きに希望を持って生きよう。西吹ではプレスリーが腰を振り、ビートルズが価値観を変えていた。ターニングポイント、演歌の世界にも押し寄せた。

「函館の女」……。産に産れた女が心を減して去った。一度は諦めた男だったが、想い熱し難く女を逢う。けれどもサブちゃんの声は明るさが満ち、躍動していた。新しい演歌の誕生だった。

「何」かがひとつ終わつた気もしますが、次の道をしつかり歩いていくだけです！」

そんな言葉を最後に昨年

末、「50回を区切りとして」N

HK紅白歌合戦を卒業したサブ

ちゃんこと北島三郎。彼が昭和40年(1965)に14枚目のシングルとして発売したのが、「存じ」函館の女だ。

言わずもがな、サブちゃんは北海道出身。父親は知内町

でイカなどを扱う漁師の親方で、その血筋から小さいころから腕っぶしが強く、在学

していた函館西高校では、西

高の大野(本名は大野稜)としてその名を轟かせていたとい

う。

そんな彼が歌手を志すきっかけが、市民会館で行なわれた「NHKのど自慢大会」だった。鐘は二つだったものの、

司会の宮田輝氏が「いやー上手ですねえ」と褒めちぎった

ことから、その気になったサブちゃん。さらに三年生を贈る会でギター片手に歌った歌謡曲が大うけし、上京を決意したというから、人間至る処青山ありか。

とはいえ、上京後は苦労の連続。盛り場で流しとして歌を唄い、それが3曲100円。

声が掛かるまで店の外で歌う生活が6年もの間続いたとい

う。当時、サブちゃんが生活していたのが三畳一間のアパ

ート。そこに時々カレーを運んできてくれた大家さんの娘

に一目惚れ。ある日のこと。サブちゃんが彼女に聞いた。

「もしも俺たちが結婚したとして、俺が(歌手として)うまくいかなかったら……」

すると彼女は、一言。

「大丈夫！2、3年は私が食べさせてあげるから！」

現夫人の雅子さんの心意気だった。二人は昭和34年(59)

に結婚。サブちゃん23歳。

それから6年後、ようやく出会ったのが、故郷函館をテーマにした「函館の女」だった。

プレスしたばかりの

レコードを聴いた雅子

さんの感想は、「いい歌ですね。絶対売れますよ」

彼女の子想はびたりと当たり、「函館——」

は140万枚を超える大ヒットに。

のちにサブちゃんは「原譲二」のペンネームで作詞作曲も手がける

ようになるが、新曲ができると、真つ先に夫人に

聴いてもらうのだとか。

「彼女が褒めてくれた曲はヒットして、そうでない曲はバツとしない。私にとつて嫁さんはずっと最強のモニターです」

サブちゃん成功の陰には内助の功があったという。いい話である。(以下次号)



函館山から望む
函館湾と函館市街。

Yamaguchi Chit

1962年東京生まれ。テレビ制作会社
制作記者を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
11年を歩く(共にイーストプレス)』
『ビューティフルキョウモント 幸せのきずな』
(リール出版)など。
また、出版プロデュース作品として
『生きる 遺家私伝(スターツ出版)』
『アキる社員(狂食ギヤル(共にイースト
プレス)など多数。